

丸山晚霞記念館だより 第2号

当館に関連する情報を、お知らせします。
今後、およそ年2回程度の発行ペースで、
内容はホームページにも掲載します。

2015年5月29日発行

- ・本多錦吉郎と丸山晚霞
- ・クレソンの話—別名「晚霞芹」の由来について
- ・平成27年度企画展「川瀬巴水と吉田博展」について

ほんだきんきちろう 本多錦吉郎と丸山晚霞

本多錦吉郎は、晚霞が師事した唯一の人物であり、明治初頭の日本における洋画振興に尽力した重要な存在である。廃藩置県によって広島から上京し、慶應義塾で英語を学んだ後、工部省に測量の見習いとして就いたが、教師だったジョーンズ氏に画才を見いだされて洋画の道に入った。

当初川端玉章に入門し、後に洋行から帰国した国沢新九郎の「彰技堂」に入門した。彰技堂は晚霞のほか、浅井忠、岡精一、小川芋銭などを輩出した当時としては数少ない画塾である。

設立者の国沢新九郎には、絵画を文字に取って代わる表現手段として注目し、西洋画をもって高尚なる文明社会をつくる一助とするといった思想があった。その思想に基づき、彰技堂での講義は主に石膏デッサン、水彩画が行われていたと思われる。イギリスから持ち帰った美術書が教育上重要なものとして扱われた。

1875年（明治8）に彰技堂は新橋竹川町に分舎をつくる。本多はその教頭に任ぜられたが、1877年（明治10）国沢は結核により伏せ、本多に一切を託して同年30歳で世を去った。

本多は塾生に対して、自然を写生する研究の第一歩として、人間の裸体を描くことと考へ、人体研究によって運筆の練習をし、さらに人間の体躯の組織を知ることは美術上大きな利益があると考え、講義に美術解剖学があったことは興味深い。

また「美術家は国民の気品を左右する大責任があるから、学問を修め、人格と趣味の向上を計らねばならない」との精神教育や、大家の人物評もしたようである。

彰技堂を引き継いだ本多が、1879年（明治12）に当時の東京府知事に出した「開業願」には具体的な教授内容が記してある。

教則

- 一 直線弧線之部
- 一 物形輪郭之部
- 一 陰影ヲ設ケタル物形之部
- 一 景色之部
- 一 人物之部

右ハ鉛筆ヲ以テ臨本ヲ模写シ諸般ノ形状及ヒ陰影ヲ配布スルノ方法ヲ学バシメ兼テ実物実景ヲ写生セシム

一 水彩画

右水彩画具ヲ以テ臨本ニ依リ或ハ実物実景ヲ模写セシメ以テ諸物形ヲ彩色スルノ方法ヲ得セシム

一 油絵

右水彩画ノ順序ト同シ

- 一 幾何図法
- 一 遠近図法
- 一 人物割合ナラビニ解剖
- 一 位置経営論
- 一 日光陰陽論
- 一 彩色論

右日々時ヲ定メ原書ヲ訳述講義シ或ハ之ヲ翻訳書トナシ各自ニ閲覧セシメ以テ画学ノ法理ヲ悟ラシム

校則

- 一 新二入学ノ者ハ其管轄庁及ヒ住所等ヲ記シタル証人ノ証書ヲ持参スヘシ
- 一 修業時間ハ午前八時ヨリ同十一時二十分迄トス
- 一 粗暴ノ挙動無用論争ヲ禁ス
- 一 臨本其他諸画具ヲ紛失シ或ハ破損スル時ハ相当ノ償金ヲ受ク
- 一 授業料 毎月金六拾銭

但シ平生常識アリテ日々来学スル能ハザル者ハ金二十五銭ヲ納メシム

国沢が開塾した当時定めた規則と比較すると、授業料が1円50銭から、半額以下の60銭になった。これは塾生が増えてきたためと考えられる。1881年（明治14）頃からは、塾生が増増したため増築を行い、専属モデルも雇っていた。

本多は日々塾生に公平な愛情を注ぎ、その作品を指導し、昼休みには英語を教えたり、時には写生旅行などへも出かけた。貧しい者へはその境遇を哀れみ、時には授業料を免除したり、画用紙



本多錦吉郎《景色》 1898年 油彩、キャンバス 府中市美術館蔵

を分け与えて励ましたりもした。このような本多は塾生からたいへん慕われていたのである。

彰技堂は1895年（明治28）で閉塾した。理由は、本多が多忙になってきたことで教授ができなくなったことが原因で、小山正太郎の「不同舎」に多くの塾生が移ったことなどが考えられるが、本多自身は不同舎でその後も教授を続けたのである。

このように多くの後進から慕われた本多は、1921年（大正10）5月26日、病没した。

「彰技堂」での丸山晚霞

興味深いものとして、^{むらいてつじょう}村居鋏城が次のように回顧している一文がある。

—（前略）本多氏から寵遇を得て、時々は師に随行して五月会や虹交会などへ、図案の教授に出かけた特技家であった。明治30年頃飯田河畔の富士見楼に、最初の同窓会が開かれたとき、老生などと共に努力し、さらに明治40年の根岸本多邸の会合の際も、何かと斡旋に努めたものだ。それから大正7、8年に本多氏の古稀会、同美術家の大法会、大森本多邸における同窓会等、会のあるところ本多氏あり、本多氏のあるところ丸山あり、という実況にて彰技堂に丸山君の添わないことはほとんどなき状態で、さらに大正10年師の喪に遭うや、丸山君が司会者として活躍し、一周忌はもちろん、三回、七回と修法ごとに、献身的努力をして報本反始の道を示し、報恩の誠と、堂友に対する温情を表現したものだ。（後略）—

当館所蔵作品にある油彩の人物模写に加えて、「図案」の下書きなども、彰技堂時代のものと推察できよう。

丸山晚霞は「我が国西洋画の歴史として、最初の1ページに特筆すべき人は本多錦吉郎である」と『洋画先覚 本多錦吉郎』（本多錦吉郎翁建碑社、1934年）の中の「第4章画塾出身諸家と堂友の述懐」の出身者の筆頭門人として恩師本多錦吉郎について語っている。塾とは、日本初の洋画留学を果たした国沢新九郎が起こした「彰技堂」のことである。国沢はほどなく病没し、この塾の一切を本多は引き継ぎ明治洋画の私的研究機関として明治洋画史に存在を示した画塾である。

丸山が牛込新小川町にあったこの彰技堂に深川西六軒堀から通ったのは、1888年（明治21）の5月である。彰技堂で学んだのち長野に帰っても、時折本多に批評を乞いにたずねたようである。丸山は、他人の作品を収集しなかったが、ただ本多作品は

愛蔵したという。丸山は本多を日本のラスキンに例え、画業もさることながら、本多の温厚な人徳にこそ芸術家としてのあるべき姿を見ていた。第二回の外遊から帰ると、丸山の家に本多を招いたこともある。明治の先覚者として著名な本多ではあるが、その作品は大変少ない。

（府中市美術館 学芸係長 志賀秀孝）

丸山晚霞は本多錦吉郎の最後の教え子であった。晚霞にとって本多錦吉郎は、明治21年に上京して以来その画塾「彰技堂」が閉鎖される直前まで学んでいることからわかるように、生涯唯一の師といえる。本多から受けた影響は、美術だけにとどまらず、芸術家としての生き方全般に及ぶ。また、丸山晚霞記念館には丸山家旧蔵の「素描群」が所蔵されているが、そのうちの数点は明らかに彰技堂時代の習作である。これらは、本多錦吉郎の画塾における指導の実際を知る上で貴重な資料と言える。

（長野県立歴史館 学芸員 林 誠）

恩師本多への思い

丸山晚霞が師としての本多にどのような思いを持っていたかは、前述の志賀氏、林氏の文中にも触れられているが、本多の十周忌には、本多錦吉郎顕彰碑の建碑を丸山晚霞は率先して提唱したとされている。

建碑にあたっての逸話がある。賛同者の中で、建碑する場所は、東京の泉岳寺とほぼ決まった時、境内の下見を丸山晚霞は3名の同志、師弟に依頼した。その3名は、高い地代や位置が悪いなどから適地とは思えず、本多の菩提寺である東海寺がよいのではと、丸山晚霞に相談なしに下見に出たところ、怒髪、天を衝くほどの剣幕で怒号されたらしい。これには、丸山晚霞が生前その功績にくらべてあまりに不遇であった本多の生涯を嘆き、何としてでも本多の名を多くに知らしめたいという思いがあった。

そのため、赤穂浪士の墓があり、多くの人が訪れる泉岳寺でなければならなかったのである。

こういった経緯を経て、昭和8年泉岳寺に本多錦吉郎碑が建立され、その除幕式には丸山晚霞が代表として祝辞を読み上げた。

さらにその翌年『洋画先覚 本多錦吉郎』を出版したのも、丸山晚霞の配意が大きかったとされている。

また、師本多を偲ぶ会を残したいと丸山晚霞が提案し、「契山会」という団体まで設立し、毎年の会合に向けた準備に丸山晚霞は迷惑顔を一つもせず励んだという。

なお、本多錦吉郎碑は、現在寺の改修工事によって一時解体保管されており、再建碑を待っているとネット上にあったので、泉岳寺に問い合わせをしてみた。

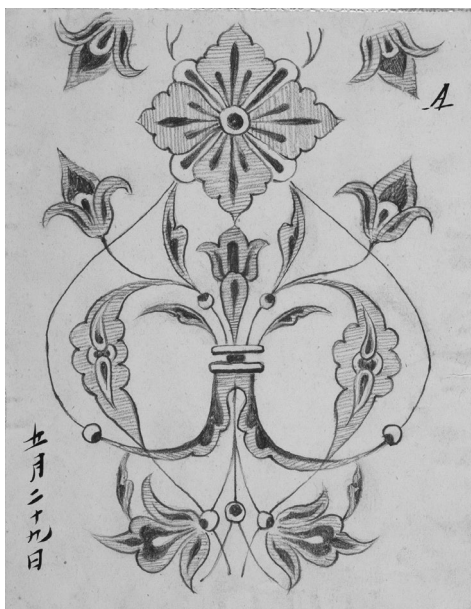
施主がいない碑であるため、実際再建の目処は立っていないということであったが、本多錦吉郎碑の建立経緯や、本多錦吉郎についての詳細を知っていただくことで、再建を泉岳寺として判断するかも知れないという話であった。

再建碑には丸山晚霞らが傾けた同等の情熱が必要なのかもしれない。

（学芸員 佐藤聡史）

参考文献：「美術解剖学の移植者 本多錦吉郎」 宮永孝 2003年

「水彩画家丸山晚霞」 日本水彩画会 1942年



当館に丸山家から寄贈された図案の一部



クレソンの話 一別名「^{ばんかぜり}晚霞芹」の由来について

クレソン。ステーキやハンバーグなどの添え物として日常見かけるあの野草の話である。

長野県の東信地方では、クレソンを「^{ばんかぜり}晚霞芹」と言うことがある。クレソンは、ここ東御市でも千曲川の川岸や、ちょっとした湧水のあるところに自生していて、特に珍しいものではないが、なぜ「晚霞芹」と呼ばれるのか。丸山晚霞が海外から持ちかえってきたからという説もあるが、日本のあちらこちらに自生していたと思えるので、この説は真実といいがたい。

クレソンは、オランダガラシといい、調べると次のようにある。

オランダガラシ（和蘭芥子）とは

水中または湿地に生育するアブラナ科の多年草。クレソン（フランス語:Cresson）ともいう。または、クレス（cress）ともいう。ヨーロッパから中央アジアの原産。日本には明治の初めに在留外国人用の野菜として導入されたのが最初とされ、外国人宣教師が伝道の際に日本各地に持って歩いた事で広く分布するに至ったと言われている。日本で最初に野生化したのは、東京上野のレストラン精養軒で料理に使われたもので、茎の断片が汚水と共に不忍池に流入し根付いたと伝えられている。現在では各地に自生し、比較的山間の河川の中流域にまで分布を伸ばしており、ごく普通に見ることができる。

爆発的に繁殖することで水域に生育する希少な在来種植物を駆逐する恐れや水路を塞ぐ危険性が指摘されている。日本では外来生物法によって要注意外来生物に指定されており、駆除が行われている地域もある。（ウィキペディアでの検索結果）

「晚霞芹」の名前の由来

「水彩画家丸山晚霞」（昭和17年 日本水彩画会刊）に興味深い記述があったので紹介したい。

同書は、丸山晚霞の逝去に際して、内弟子の小山周次が編纂した遺稿集である。このうち、日本水彩画会研究所に入学した平澤大暲*の追悼文「晚霞芹」にこう記してある。

—（前略）先年水彩画会の懇親写生旅行で川中島近くの森村の杏花村に行きました時、村の少年が「晚霞芹をつんで行って晩飯のおかずにしよう」と私の画架のそばで芹をつみ出しましたので、「晚霞芹というのはどれですか。なぜ芹に晚霞とつけたのですか」と問いますと、少年は「この芹は元は誰も食べられることを知らなんだのだが、晚霞先生が外国から帰って、この村でこの芹を見つけて、『これはうまい芹だぞ』と初めて教えてくれたので、皆が晚霞芹と名付けて、食べるようになったんだよ」と答えて、せっせと芹をつんでいました。その時に丸山先生の植物に対する御博識が先生の熱烈なる郷土愛の一助となって表れていることを知って敬服惜しく能はざるものがありました。（後略）—

ヨーロッパを巡った晚霞は、クレソンを現地で食べて特徴を記憶していたか、もしくは日本にも自生していることを知っていたのかも知れない。

毒草説の根拠

筆者は、晚霞芹にはよく似た毒のある種類があるという説も聞いたことがあるのだが、小諸義塾時代の晚霞の教え子であった常田宗七が、同書で次のように記している。

—（前略）丸山先生の祢津村の自宅の方へも水彩画を学びに行った人も相当あったらしい。関晴風君はその一人だろう。神津港人氏は野沢中学生だったが、絵画ば初めの頃先生に私淑し、志賀村の方から遙々学びに行ったのだ。自分も先生のご自宅を訪ねて外国で描かれた作品を見せてもらい、当時珍しかったオウムや、今は信濃の川にはびこるタガラシ（西洋料理のツマ）草などを分けてもらった。（後略）—（「小諸義塾の頃の晚霞先生を偲びて」より抜粋）

タガラシも、ごくありふれた植物だが、有毒であり、文中のタガラシはクレソンのことであろう。下の写真を見ても、クレソンと類似であるとは思えぬが、食した時の辛みが共通するため、「毒草」説が生じたものと考えられる。

タガラシとは

キンポウゲ科。水田や用水路などに生える雑草で、有毒植物。和名の由来は、噛むと辛味があることから「田辛子」という説と、収量の少ない田に生えることから「田枯らし」という説がある。日本全土の水田のような水たまりによく生える。

プロトアネモニンという毒をもち、誤食すると消化器官がたれたり、触ると皮膚がかぶれたりする。

丸山晚霞が小諸義塾の図画教師となったのは、1904年だから「晚霞芹」と呼ばれるようになったのは、第一次洋行（1900～01年）帰国後しばらくしてからであることが推察できる。



タガラシの葉と花

最後に

イギリスのアレスフォードという街は、「クレソンの首都」と呼ばれる一大生産地で、毎年5月の第3日曜日「クレソン祭り」が開催される。クレソンをつかった家庭料理の露店が数多くでて、大勢の人で賑わうということである。（学芸員 佐藤聡史）

*平澤大暲（ひらさわ・たいしょう）：本名は平澤貞道。1913年日本水彩画会創立に参加。帝展・文展無鑑査。日本テンペラ画会を結成、のち会長。帝銀事件で逮捕、死刑判決。獄中でも絵筆を持ち、1300点を越える作品を描いた。死刑執行のないまま、昭和62年獄中で没、95才。

平成 27 年度企画展

「川瀬巴水と吉田博 木版画展」(仮称) について

平成 27 年 11 月 7 日 (土) ～平成 28 年 1 月末 (予定 2 部構成)
会期中に総入替を行い、通算で約 250 点を展示します！

明治維新によって、海外文化が入った日本では、伝統的な日本文化は排斥の憂き目に遭ったり、新しい技術によって衰退していった。浮世絵もその一つで、写真や新聞によって役割を奪われた結果、浮世絵を刊行する版元や絵師、彫師、摺師といった人たちも激減していくが、一方ではそのことを惜しみ江戸を回顧する声が大きくなった。

当時、浮世絵は海外で高い評価を得ており、わざわざ日本に浮世絵を学びに来る外国人もいたほどであった。

こういった中、浮世絵の復刻や時代を見据えた新しい木版画の制作を目指した版元が現れた。浮世絵商の渡邊庄三郎で、1909 年 (明治 42) 京橋に渡邊版画店を開業した (現在は、東京・銀座に「渡邊木版美術画舗」となっている)。

この渡邊版画店では、試行錯誤の末に輸出目的の木版画の制作に成功し、当初は橋口五葉と組んだ。しかし、木版画の出来を橋口が気に入らず、結果として一作で終わってしまった。その後、伊東深水を絵師に迎えて、1916 年 (大正 5) 《対鏡》、翌年から《近江八景》といった作品を世に送った。

伊東深水、川瀬巴水とも鏑木清方の門下で、深水の《近江八景》を見た川瀬巴水は、木版画に開眼し、渡邊版画店の絵師として、その道を歩み始めたのである。

巴水を絵師とした作品は好評で、渡邊版画店では 1919 年 (大正 8) から、「東京十二題」「旅みやげ第一集」といったシリーズものを刊行した。このことから、これ以降の巴水は国内を旅行して写生する日々を過ごすことが多くなる。

1923 年 (大正 12)、関東大震災が起り、巴水の自宅は全焼し、描きためた写生はすべて焼失してしまった。それどころか、渡邊版画店も全焼、すべてを失った。

しかし、渡邊庄三郎は再建を目指し、巴水にわずかに残った版画を持たせ、これを売って旅費とし、また写生をしてくるとして送り出した。この旅行は 102 日に及び、「日本風景選集」が完成、

川瀬巴水
馬込の月

「旅みやげ第三集」が生まれたのである。

川瀬巴水は生涯にわたり、600 点を超える作品を制作し、1957 年 (昭和 32)、大田区の自宅で世を去った。

渡邊庄三郎は、絵師に洋画家を招きいれたいと考えていた。吉田博にその白羽の矢が立ったのである。もっとも吉田が自ら木版画の絵師として名乗り出たというのではなく、ともに関係のあった松木喜八郎を通じて依頼を受けたということである。1920 年に吉田が絵師を担当した《明治神宮の神苑》が刊行され、その後風景画などで計 8 作の作品が制作されたが、この時吉田博には木版画への傾倒はほとんどなかったのである。

1923 年 (大正 12)、関東大震災では、巴水同様に吉田の版木はおろか、吉田が貰うはずであった版画もすべて灰と化した。手元にはわずかなものが残っていただけであった。

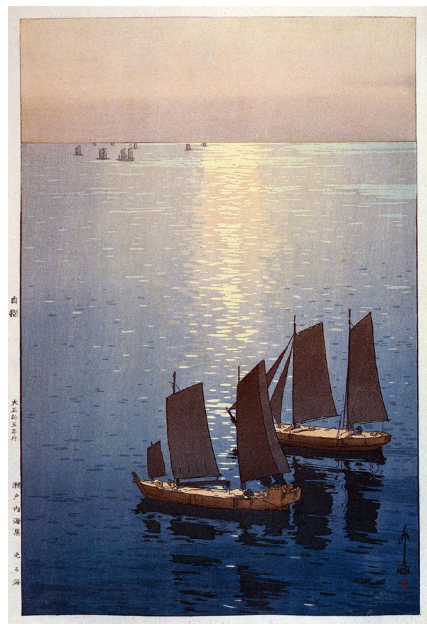
吉田は、この年 12 月太平洋画会会員の被災者救援の目的で、作品を携えて渡米、渡欧した。ここで、版画は予想外の好評を得た。さらに、浮世絵が高い評価を受け、深水や巴水の作品がアメリカ市場で好評であったこと、また質の悪い浮世絵も市場に流通していることを目の当たりにして、時代に合った新しい木版画の制作を決意した。

1925 年 (大正 14) に帰国した吉田は、取材したアメリカ、ヨーロッパの風景を題材とした木版画の制作に取りかかり、以後国内外の風景を題材に、259 点の名作を残したのである。

木版画ならではの色彩感や透明感は、多くの人を必ず驚嘆、感動させるであろう。そのために、現在非力ながら準備を進めている次第であり、ぜひご期待いただきたい。

なお、川瀬巴水の作品は友好都市である大田区の郷土博物館の所蔵であり、また丸山晚霞の次男^{きよし}咬^{てんこう} (雅号丸山天咬) が、大田区に記念館のある川端龍子^{かわばたりゅうし}門下であったことから、大田区との文化交流のきっかけとなれば喜びこの上ない。

(学芸員 佐藤聡史)

吉田博
光る海

丸山晚霞記念館だより 第 2 号 平成 27 年 5 月 29 日発行

発行者：丸山晚霞記念館

〒 389-0515 東御市常田 505-1 TEL 0268-62-3700